

## 第31回名曲コンサート

## PROGRAM

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven

コリオラン序曲 ハ短調 op.62 (約8分)

Coriolan Overture, op. 62

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 op.37 ★ (約34分)

Piano Concerto No.3 in C minor, op. 37

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ *Allegro con brio*第2楽章 ラルゴ *Largo*第3楽章 ロンド:アレグロ *Rondo: Allegro*— 休憩 (20分) — *Intermission*交響曲 第5番 ハ短調「運命」 op.67 (約31分)

Symphony No.5 in C minor, op. 67

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ *Allegro con brio*第2楽章 アンダンテ・コン・モート *Andante con moto*第3楽章 アレグロ *Allegro*第4楽章 アレグロ *Allegro*指揮:ガエタノ・デスピノーサ *Gaetano d'Espinosa, Conductor*ピアノ:クレア・ファンチ *Claire Huangci, Piano (★演奏曲)*管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2014 2/1 (土) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

## 3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

## 世界が注目する新鋭が共演

まさに「新鋭」同士の共演と言えるコンサート。イタリア出身でドレスデン歌劇場コンサートマスターとして活躍していたデスピノーサ、アメリカ出身で各地のコンクールで入賞している女性ピアニスト、ファンチ。この新鮮な才能の組み合わせによってオール・ベートーヴェン・プログラムが披露される。コンサートマスターから指揮者への転身というのは珍しくないかもしれないが、デスピノーサの場合、その転身後の活躍ぶりがかなり注目されている。転身後すぐ成功を収めるその才能を、今回はベートーヴェンの名曲で体験することが出来るという訳だ。ファンチも素晴らしいテクニックと音楽性を持つピアニストなので、共演が楽しみだ。

## ハ短調にこだわったプログラム

そして演奏されるベートーヴェンの作品だが、ふたつの有名な「ハ短調」作品に加え、最初に演奏される「コリオラン」序曲もハ短調なのだ。「ハ短調」はベートーヴェンにとって大事な調で、この調を使った名曲が多い(例えばピアノ・ソナタ「悲愴」などもそう)。特に有名な作品と言えるのが交響曲第5番。交響曲史上で最も有名な作品と言っても良いだろう。冒頭の悲劇的な様相が、最終楽章では明るく輝かしい響きに変わる。ハ短調は重々しい調であるが、それぞれの作品でそのイメージが違う。この3つのハ短調作品には、ベートーヴェンの考えていた悲劇、運命、人間の雄々しさ、などが表現されているように思える。演奏を聴きながら考えてみよう。

片桐 卓也 (音楽ライター)

**ここだけは絶対チェックしておきたい!ライターおすすめ『必聴ポイント』**  
check

交響曲第5番「運命」の冒頭。この有名な主題の演奏の仕方とその指揮者の個性が分かると言われるほど、十人十色の演奏なので、デスピノーサの指揮ぶりをしっかりチェック。

# PROGRAM NOTE

曲目解説——演奏をより深く楽しむために 片桐 卓也(音楽ライター)

## コリオラン序曲 ハ短調 op.62

初演:1807年 ウィーン

### 古代ローマの将軍をテーマにした戯曲をもとに作曲

序曲と名前が付けられているが、これはオペラや戯曲のための序曲ではなく、演奏会のための序曲である。古典派からロマン派にかけての時代には、演奏会は非常に多彩なプログラムで行われており、その演奏会全体の序曲が必要とされていた。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は1807年にこの重厚な作品を書いた。彼の友人で、ウィーンの宮廷秘書官を勤め、詩人でもあったハインリッヒ・ヨーゼフ・フォン・コリン(1771~1811)の同名の戯曲を読んで感動したからと言われている。その戯曲「コリオラン」は古代ローマの有名な将軍であるコリオラヌスを描いたもので、シェイクスピアも同じ人物をテーマに「コリオレイナス」という悲劇を書いている。音楽は冒頭から非常に緊張感の高いもので、全体が力感に満ちている。現在ではベートーヴェンが書いた数多くの序曲の中でも人気作品として演奏機会も多い。この曲も主調はハ短調である。

#### 楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 op.37

初演:1803年 ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場

### 調性の変化に作曲家らしさを感じる傑作

ベートーヴェンがウィーンに到着したのは、1792年11月のこと。ハイドンなどに師事しながら、ピアノの即興演奏で頭角を表し、作曲家としても活動を始めた。そのウィーンでの活動初期に重要だった作品がピアノ協奏曲であり、第1番と第2番は1795年に完成した。その初演はいずれも1795年だったが、作曲者であるベートーヴェン自身がピアノ独奏を担当して初演されている。そして、しばらくおいた1800年にこの第3番が作曲された。初演は1803年4月5日、ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で、やはりベートーヴェン自身がピアノを担当した。その前年、1802年には耳の疾患からくる絶望感の中で有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれている。しかし、第3番の協奏曲の初演を自分自身で担当したことを考えれば、その時代はまだそれほど深刻な病状では無かったようだ。第4番の協奏曲は1808年に初演されているが、その時までベートーヴェンは自作のピアノ協奏曲の独奏ピアノを自分で演奏している。第5番は他のピアニストに初演を委ねた。

第3番はハ短調だが、これはベートーヴェンが愛していたモーツァルトの2つの短調のピアノ協奏曲のうち、第24番と同じ調性である。その点からこの第3番の第1楽章の主題にもモーツァルトの影響があるとされているが、全体を通して聴いてみれば、やはりベートーヴェンらしい力強さが感じられる作品である。全体は古典派の協奏曲らしく3つの楽章からなる。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、2分の2拍子。冒頭の弦楽器による主題提示に始まり、まずオーケストラが演奏した後で、ピアノのソロがカデンツァ風な楽想で登場し、そこにオーケストラが加わって、音楽を発展させて行く。最後の

部分には大きなカデンツァが置かれているが、ベートーヴェン自身が書いたものの他に、クララ・シューマンなどが書いたものもある。

第2楽章はラルゴ、ホ長調、8分の3拍子。穏やかな和声的なピアノの主題から始まるが、全体の主調ハ短調に対して、ホ長調という調を使い、中間部は口長調となるなど、調性の面ではとても斬新である。

第3楽章はハ短調、ロンド(アレグロ)。4分の2拍子。ピアノによる軽快なロンド主題に始まり、それを繰り返す。そして変ホ長調の副主題、中間部では変イ長調の主題が登場する。そしてコーダに入るとハ長調となり、華やかに終わる。

#### 楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## 交響曲 第5番 ハ短調「運命」 op.67

初演：1808年 ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場

### 交響曲史上最も有名な主題が登場

交響曲第3番「英雄」(1804年完成)で音楽的に大きな飛躍を遂げたベートーヴェン。その後に第4番が1806~07年にかけて書かれ、その後1807~08年にかけてこの第5番と第6番「田園」が並行するように書かれた。初演は1808年の12月22日、アン・デア・ウィーン劇場で行われ、その時には「田園」、ピアノ協奏曲第4番、合唱幻想曲、そしてミサ曲ハ長調なども一緒に演奏された。このラインナップを見ても想像できるように、かなり長い演奏会であった。

交響曲第5番は日本では「運命」のサブタイトルで知られているが、欧米ではあまりこのサブタイトルは使われていない。ベートーヴェンの秘書であったアントン・シントラー

(1795~1864)は、この交響曲の冒頭の主題についてベートーヴェンに、その意味を尋ねた時に、ベートーヴェンは「運命はこのように扉を開くのだ」と語ったとされ、そこから「運命」のサブタイトルが付けられた。

同時期に作曲されていた「田園」が各楽章に表題をつけ、第3~第5楽章を続けて演奏するなど、新機軸とも言える構成を持っているのに対して、この第5番のほうは、冒頭の動機に含まれるリズム、音程関係などを徹底的に利用して、それを各楽章にちりばめている。全4楽章が有機的に繋がって構成されているのだ。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、4分の2拍子。冒頭の有名な動機を、この楽章の中で強く意識させるようにティンパニなどがこのリズムを執拗に提示し続ける。第2主題は穏やかで流れるような旋律によるもの。

第2楽章はアンダンテ・コン・モート、変イ長調、8分の3拍子。主題と変奏、そしてコーダからなる緩徐楽章。

第3楽章はアレグロ、ハ短調、4分の3拍子。チェロとコントラバスの冒頭主題は第1楽章の主題を活かしたもの。中間部のトリオはハ長調となる。そしてちょっと不気味な最後のコーダの部分からそのまま次の最終楽章に入る。

第4楽章はアレグロ~プレスト、ハ長調、4分の4拍子。ハ短調から一転して、ハ長調の明るくダイナミックな音楽となる。この楽章にはピッコロ、コントラバスーン、トロンボーンが使われるが、交響曲でこれらの楽器を使ったのは史上初とされている。

#### 楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラバスーン、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部